

Title	In the Country of the Smallest Things: Objects Embracing Fictionality in Paul Auster's Works
Author(s)	植村, 真未
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88118
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (植村真未)

論文題名

In the Country of the Smallest Things: Objects Embracing Fictionality in Paul Auster's Works
(小さき物たちの国で——Paul Auster作品における虚構性を包含する物)

論文内容の要旨

Paul Austerの作品を見渡した時、そこに常にあるのは物である。そしてそれは、*Report from the Interior*で書いている彼の最初の記憶と結びついている。些末な小さき物たちは、Austerにとって、声を持ち、歩くことができるものたちであった。本論はAuster作品におけるオブジェクトの描写を詳らかにし、それぞれが作品において、虚構性を包含する上で機能していることを分析する。

Austerの詩で多用されるモチーフの一つが石である。Austerの詩作品において、石は沈黙、言語による表象不可能性を意味している。しかし、この解釈は小説や映画で使われている石にはあてはまらない。第1章では詩作品、*Lulu on the Bridge*、そして*Moon Palace*を中心にAuster作品における石の描写を見ていく。*Lulu on the Bridge*の石は青白く光り、浮遊し、まったくの他人であったIzzyとCeliaの二人に絆を感じさせる。お互いを自分の想像力の産物であると疑うほどに彼らは激しく恋に落ちる。*Moon Palace*における石である月は、実のところNathaniel Hawthorneが説明した芸術家に想像力を与える光と同質のものである。このことを考慮すると、*Lulu on the Bridge*でのIzzyとCeliaの関係は、彼らが石の発光を見ることで、想像力が強まり、理想の恋人としての互いを想像したと考えられる。沈黙の象徴だった石は、芸術家の創造を促す、詩神となったのだ。

第2章は*Man in the Dark*における表現 “une nature morte” を議論の出発点とし、身体の表象を分析したものである。「静物」は基本的に人間を指さないにもかかわらず、*Man in the Dark*では人間の身体を指し示すのに使われている。そのことから、*The Invention of Solitude*、*Sunset Park*、*The Brooklyn Follies*、*Travels in the Scriptorium*、*Leviathan*を扱い、死の描写を概観した。Austerは作品内で死を描く際、残酷な死の瞬間や、死体を克明に記すことはあまりない。しかし、*Man in the Dark*ではTitusの死の様子を詳細に書き、その死体を一つの「静物」と表現する。このことは、Katyaが映画においてしたのと同様に、物を切り口としてTitusの死を読み解くことを可能にするためである。Katyaによって “une nature morte” として、見られたとき、Titusの死体はその視線によって射貫かれるのではなく、その生を呼び起こすことができる物になる。

第3章では*The Music of Chance*、*In the Country of Last Things*、*Oracle Night*を取り上げ、物の蒐集行為に焦点をあてた。*The Music of Chance*でNasheは一人、石を積む。*In the Country of Last Things*で、Annaはディストピア世界に身を置き、がらくたを拾い生活をしている。*Oracle Night*で蒐集されるのは、物語であるが、これらの物語は文字の物質性を想起させる描かれ方をしている。3作において、登場人物たちがそれぞれに意味を為さなかった物の間に脈絡を見出したときに、暴力事件、流産や死といった破局へと物語は展開していく。そのことをWalter Benjaminのアレゴリー論と照らし合わせたとき、Austerの描く新たなアレゴリーを読み取ることが出来る。

第4章では、部屋の描写を精査し、部屋と執筆家たちとの関係を考察する。Austerの小説内に描かれる部屋は、その部屋の持ち主の特性を表すべく書かれることが多い。*The Book of Illusions*、*The Locked Room*、*Leviathan*、*Travels in the Scriptorium*には、小説家や研究者といった物を書く登場人物が出てくる。そして、彼らの部屋は、彼らの執筆活動と大いに関係しているのである。これらの作品を見渡した時、彼らに共通しているのは、その部屋が世間から隔離されているように感じ、そしてその部屋を監獄に例えていることである。部屋を描写する立場であった書き手たちはむしろその部屋に閉じ込められ、書くことを強要されているのである。このことは*Travels in the Scriptorium*を見ると明らかで、部屋の方が、書き手たちに書かせている物であると言える。

第5章では、*Timbuktu*に登場する人間の支配の客体である犬を取り上げる。物語は全知の語りで語られ、視点人物に犬のMr. Bonesが採用されている。Mr. Bonesが考えることができる犬であることを、語りの視点を精査することで明らかにし、犬と人の二項対立的な関係を攪乱する存在であることを詳述する。このことは、人間にとっての客体としての地位を脱却し、Mr. Bonesが主体性を持ったオブジェクトとなり得ることを示唆している。本論文において明確になったことは、Austerが作品内で物を書くとき、彼が目指すのはその物自体を正しく描写することではない。むしろ、その物を使って言葉を紡ぎ、その言葉たちが逃れることのできない虚構性を進んで受け入れるということである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (植 村 真 未)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	渡邊 克昭
	副 査	教授	畑田 美緒
	副 査	教授	中村 未樹
	副 査	名誉教授	貴志 雅之
	副 査	准教授	岡本 太助

論文審査の結果の要旨

本論文“*In the Country of the Smallest Things: Objects Embracing Fictionality in Paul Auster’s Works*”は、現代アメリカ作家ポール・オースターの作品に登場する一見瑣末で日常的な「モノ」に着目し、それらがいかに想像力を喚起し、多様な次元において虚構の世界の創出にどのような役割を果たしてきたか、その系譜を綿密に辿ることにより、オースター批評の新規軸を打ち出そうとする野心的な論考である。幼少の頃から日常の中に溢れる小さき「モノ」たちに名を与え、それらの声に耳を傾けてきたオースターの「モノ」との関わりから説き起こし、彼の詩や小説において重要な役割を果たす石の詩神としての役割、「静物」としての死体、意味を喪失した「モノ」の蒐集行為、物語を紡ぐ「部屋」と執筆家たちとの関係、卑小な動物といった多角的な視座より、一貫して「モノ」を手がかりにオースターの主要作品を読み直した本論文は、独創性に富み、先行研究では看過されてきた視角から、オースター批評の新たな地平を切り拓くことに成功している。

第1章では、Austerが初期の詩の中で多用するモチーフの一つとして「石」に注目し、沈黙や言語による表象不可能性を抽象的に提示していた「石」が、のちに彼の映画『*ルル・オン・ザ・ブリッジ*』(1998)と小説『*ムーン・パレス*』(1989)において、どのようなテーマ的発展を遂げるかを丹念に追求した好論である。『*ルル・オン・ザ・ブリッジ*』に描かれた青白い微光を放って浮遊する石は、二人の作中人物の想像力を刺激し、自らが互いを創出したかのように理想の自己を結びつける結節点となっており、さらに『*ムーン・パレス*』において空に浮かぶ石としての月は、ネオンサインや絵画の『*月光*』へと変奏され、芸術家の創造を促す詩神となっているという指摘は評価に値する。

第2章は、『闇の中の男』（2008）に登場するフランス語“une nature morte”を手がかりに、詳細に描かれたタイトスの陰惨な死体が「静物」と表現されていることから説き起こし、『孤独の発明』（1982）、『リヴァイアサン』（1992）、『ブルックリン・フォリーズ』（2005）、『写字室の旅』（2007）、『サンセットパーク』（2010）における死の描写を詳述している。死者の記憶と共にあるイメージと、「モノ」としての死体が別物であることを確認したうえで、『闇の中の男』におけるタイトスの死は、映画に描かれた事物を丹念に読み解くカーチャにとって、生を呼び起こすことができる「モノ」の役割を逆説的に果たしているという結論は、熟考のあとが窺え、納得のいくものである。

第3章は、「モノ」を蒐集するという行為が、オースター文学においていかなる意義を帯びているかをテキストに密着して緻密に解明しようとした章である。『偶然の音楽』（1990）では、ポーカーで負債を抱えることになったナッシュが、一人で石を積む日々を送ることになるが、その過程で石が日記としての役割をもち始め、ゲーム以前は無意味に思われていたフラワーのコレクションの意義を丁寧に論述している。『最後の物たちの国で』（1987）では、「モノ」が次第に消失していくディストピア世界に飛び込んだアンナが行う「ガラクタ拾い」のみならず、ウォーバンハウスの蒐集物にいかにも物語が付与されていくかを精緻に分析している。また、『オラクル・ナイト』（2003）論では、蒐集される物語には文字の物質性を想起させる描写が施され、脈絡のない各々の物語に繋がりが見出されたとき、物語は破局を迎えるという分析がなされている。

第4章は、オースターの小説における執筆行為が物理的空間としての「部屋」と関係が深いという洞察に基づき、『幻影の書』（2002）、『鍵のかかった部屋』（1986）、『リヴァイアサン』、『写字室の旅』といった作品内で描かれる部屋の描写を精査し、部屋とそこで執筆活動を展開する登場人物たちが織りなす関係を鮮やかに描出している。ドイツ語で部屋を意味する名前を主人公が付与されている『幻影の書』をはじめ、これらの作品には共通して、部屋が執筆者を世間から隔絶するのみならず、むしろ部屋のほうが執筆行為を行わせているという指摘は説得力に富み、創見に満ちている。

第5章は、主人と犬のミスター・ボーンズの旅路を描いた『ティンブクトゥ』（1999）を取り上げ、「モノ」のごとく人間に支配される卑小な存在でありながら、思考可能

な視点人物に犬を設定したことにより、いかに人間の獣性が前景化され、動物と人間の二項対立的な関係が攪乱されるかを、手堅く分析している。物語の結末において、言語能力を手に入れるべく、死後の遠い世界、「ティンブクトゥ」を目指すミスター・ボーンズについて、客体からの脱却の可能性を探り当てようとしているという解釈は傾聴に値する。

以上を踏まえ、結論においては、オースター文学において「モノ」が描かれるとき、彼の主眼は、そうした事物の正確な描写ではなく、それらに触発されていかに言葉が紡がれ、虚構世界が創出されるかというところにあるという、考察が明快に導き出されている。

審査委員からは、俎上に載せた「モノ」の範疇に揺らぎが見られる、ヴァルター・ベンヤミンのアレゴリー的思考やナサニエル・ホーソンのロマンスにおける中間領域の議論の援用が必ずしも十全に接合されていない、結論部分のダナ・ハラウェイの伴侶種に関する議論が唐突である、などの指摘がなされたが、全体として、独創的なテーマの発見、緻密なテキストの読解と分析、実証性に富む議論の展開という点では、オースター批評に新たな視座を提示した論考として高く評価できる。本論文からは、執筆者がアメリカ文学・文化に関して鋭い問題意識と研究能力を有していることが窺え、今後さらなる研究の進展が期待できる。

上記考査に基づき、総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。